
みえないなにか

シュンスケ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

みえないなにか

【Nコード】

N2498BA

【作者名】

シユンスケ

【あらすじ】

ある日見え始めた少女

その時から俺のもうひとつの人生が回り始める

予兆

・・・て

何か聞こえる

た・・・て
たすけて

暗がりの中、ぽつんと、女の子が踞っている

『ねえ、どうしたの?』

女の子は返事をしない

『何が怖いの?』

震える声であの子は言った

あなた

『どうして?』

だってあなたは・・・

がん。

頭に鈍い衝撃が走る
見上げると、鬼が棍棒を持って、立っていた。

おう、いい度胸だな俺の授業で寝るとは。

時計は3時30分を指している。

どうやら俺は丸々一時間寝ていたようだ。

しかも、社会科担任の西崎の時に。

西崎、通称？鬼？は教科書を片手に仁王立ちしている。

放課後、社会科研究室に來い。

鬼はそれだけ言っつて、姿を消した。

はあ・・・

俺はため息をついた。

あー最悪。

俺は部屋でで思いつく限りの悪態をついた。

放課後、俺は鬼の元へ行った。

鬼は、いつもお前の態度が気に食わん。と言っつなり俺に教科書に
よる先制スマッシュを決めた。

その後はいやみ&しばき。

今でも痛い。

家に帰ると次は、蛇が二匹。

親からはたつぷり説教。狡猾な手を使い、俺から自由を奪つ。

結果、外出禁止・こづかい没収

これを最悪と言わずして何が最悪なのである。

しかし、いくら腹が立っていても不思議と眠りにつけるものであった。

そこには、一人女の子がいた。

はじまり

女の子は怯えていた

そしてぼくと目を合わせると走り去った

『まっつて』

ぼくは追いかけた

しかし女の子はどんどん離れていく

どんどん離れていってそして見えなくなった

気がつけば、ぼくは深い森の中にいた

暗い森の中ぼくは何処へとも知れず進み続けた

進み続けているうちにふと、森の異常さに気がついた

何の音も聞こえてこないのだ

聞こえてくるのは、ただ木々がそよぐ音とぼくの荒い息づかいだけ

まるでこの森が死んでいるようだった

と、突然まばゆい光が木々の隙間から漏れてきた

その光は神々しくまた、暖かい

そこには、あの女の子がいた。

そして、ぼくに笑いかけてきた。

光のように暖かくしかしなぜか悲しそうな笑み。

今までずっとあなたを見続けたけれども、あなたは私を見てくれ
なかった

でもあなたは私に気がつき始めている

私はあなたが気がついてくれて嬉しい

でも、後悔もしている

あなたの人生を狂わせてしまうかもしれないから

だからもう私を追わないで

少女は静かにしかしはつきりといった

凜とした気丈さに少女の必死さが伝わってきた

『でも、君はどうするんだい？』

彼女は少し体を震わせた

私はずっとここにいます

それを聞いてぼくはためらった

『君はそれでいいの？』

じゃあ、あなたは私と一緒に地獄を見てくれる？

彼女はそれだけを言った

三つの歯車（前書き）

ひとつでは動かないものも

いくつが集まると動き出す。

まるで、時計の中の歯車のようだ・・・

三つの齒車

ふと起きると俺はベッドの中にいた。どうやらぐっすり寝ていたようだ。

「ご飯よ」

下から母の声が聞こえる。

昨日、あんなに怒っていたのに今ではすっかり収まっているようだ。まったく、こっちはまだ引きずっているのに。
しぶしぶ俺は一階に降りた。

「ほらちゃんとご飯を食べなさい。今日は休日だし部活もないから勉強するのよ。」

部活がない、のではなく 部活に行かせない、が正しい。心の中で訂正する。

今日母は仕事である。つまり今日は、勉強しない、いや勉強できないのだ。

心の中でほくそ笑みながら、はいはい と返事をする。

と、ふと俺は妙だと感じた。

漠然としているが何か可笑しいのだ。

確かに母はいつも通りだし、家の中も変わらない。ご飯もおかしくない。

しかし何かが違うのだ。

「ほら、冷めるわよ」

母に急かされるまま俺はご飯を食べた。

「じゃあ行つて来るわよ」

「いってらしゃい」

ご飯を食べながら言った。

ふう、食べ終わった。

とりあえず何をやるうかな。そんなことを思いながら俺はボーっとしていた。

『クスクス』

『クスクス』

何処からともなく笑い声が聞こえる。

『見つけた』

幼い男の子の声のようだ。

テレビをつけばなしだった。自分の部屋に行つて確認する。テレビはついていない。ならラジオか。しかしラジオもついていない。

『バイバイ』

右足に痛みが走る。

しかし、右足はなんともない。

なんともないはずなのに動かなかった。

俺は怖くなり、家から飛び出た。足を引きずり、逃げる。ひたすら逃げる。

『クスクス』

なのに声はまだ聞こえる。

ちくしょう。

夢中で走る。

気がつくと俺は森の中にいた。

ここらには森など無いはずであった。

ふと、まばゆい光が差す。

そこには女の子と俺がいた。

もうひとりのぼく

女の子は苦しくまた悲しそうだった。

いったい子の子は何を抱えているのか、ぼくは気になった。

『君はぼくの知らない何かを知っている？』

女の子は口を閉じたままだ

『ぼくは大丈夫だから、心配しないでいいよ』

ぼくが彼女の肩に手を置いた瞬間、

頭の中にひとつの映像が流れ込んできた

それは、僕の夢とそっくりだった

彼女は はっ、となり慌てて僕の手を引き離れた

『君はいつたい誰？』

ぼくは湧き上がる疑問を抑えられなかった なぜ、ぼくの夢が彼女に触れると見えたのか 子の子の夢にどんな意味があるのか

見ると、女の子は青ざめてしまっていた

しかし覚悟を決めたようので、恐る恐る話を始めた

私はあなたともうひとりのあなたのつなぎ目

あなたともうひとりのあなたは異なる世界にいる

でも、私がいるからあなたともうひとりのあなたは、会うことができる

でもそれはいけないこと
私は何処にもいてはならない
私は、本当はいない異界の狭間の子なの

がさがさ

女の子は話をやめた

がさがさ

音がする

どん、と人が倒れてきた
それは、ぼくであった

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2498ba/>

みえないなにか

2012年1月7日00時46分発行